
東方花妖怪

八雲糖類おう@若干鬱気味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方花妖怪

【Nコード】

N6772Y

【作者名】

八雲糖類おう@若干鬱気味

【あらすじ】

風見幽香を小さくした感じの男の娘が幻想入り！？とりあえず夢幻館メンバーあたりと絡ませる予定です。この作品は作者のもうかたつぽの作品が詰まったとき、やる気でないときに更新しますのであまりマメに更新できません。ゆっくり気長に生暖かい目で見守ってくださいね（断る

いちわめ ちびゆうかりん？（前書き）

はじめまして、もしくはこんにちはは糖類おうと申すものです。
特にありませんが見てくださいね。文才カスですけど

いちわめ　ちびゆうかりん？

ここはとある町のアパートの一室。その部屋のベットには10人中15人が振り返るほど可憐で幼さが残る顔の人が眠っていた。時刻は6時代で空は澄んで、鳥がTNTNと鳴く声が聞こえる。

ピュピュピュッーピュピュピュッー！

「ん・・・ふあゝ。よく寝たゝ」

目覚まし時計の鳴る音で目を覚ます。体を起こし、けのびをしてからベットから出る。

「今日から新しい学校ねえ・・・変なのがないと良いのだけど」
寝室から洗面所に行き、顔を洗い、自慢の緑色のショートヘアを梳かす。それが終わると今度は台所に行き簡単に朝食を作る。作るといつてもトーストだけであるが。差し詰め料理は出来ないのだから。

「うるさいわね。余計なお節介よ」

・・・と言ってる内にトースターから怪しい煙が出てきた。

「えっ！？ちよ・・・なにこれ！？ゲホッゲホ」

どうやらトーストも作れなかった様だ。白い食パンがあっという間にダークマターと化してしまった。

「まったく。このトースター駄目ね。新しいの買ってこないと」

自分の失敗を完全にトースターに被せ、ダークマターをゴミ箱に捨てる。そんな常人じゃありえない朝食作りをしたせいで登校時間になつてしまい、急いで制服を着る。

「今回の学校のスカート丈短いわね。どんな性に飢えたやつが作ったのかしら」

制服に対し毒を吐きつつも着々と準備を済ませる。

「これで・・・よしと。それじゃ、いってきます」

誰も声を返すことはないものの挨拶をしてから学校に向かう。

>??? (主人公) 視線<

「しつれーしまーす。山田先生はいらっしゃいますでしょうか?」

とは言ったものの教員はまだ数名しかおらず、私の学年を考えるとどれが山田かわかってしまつが一応聞いておく。

「おお、ここだ。って君は・・・」

声が出た方向を見てみると絶対に一生童貞確定のキモデブのおっさんがいた。やだあれ近づくと穢れそう。

「本日付でこの学校に転校することになった者ですが・・・受付の方に聞いたら担任になる先生の山田先生の所へ行けと言われたので」

「えっとすまないがこっちがもらった資料では男って書いてあるんだが・・・多分記入ミスだろう。後で直しておこう」

まあ女顔っていうのは否定しないわ。けど資料に書いてあるものって私直筆じゃない。なんでそれが記入ミスなのよ。なんかぶん殴りたくなってきたわ。

「いえ、それは結構ですわ。私、男ですもの」

転校早々問題起こすのはいろいろとまずいから必死に堪え、笑顔でそう伝えてやったわ。

「」「」「マジで!?!」「」「」

あろうことが教員全員がこっちを見てきた。別に私は視姦なんて興味ないからうれしくもなんともないんだけど・・・

「マジよ、悪かったわね女顔で」

「・・・すまない。そつそれじゃ時間だな。クラスへ行くぞ」

逃げたなこいつ。

「それじゃ、俺が入って来いって言ったら黒板に名前書いて自己紹介しろよ」

そういうとガラガラツとドアを開け入って行った。どうやらHRをやっているようね。なんか生徒の声で転校生がどうのこうのって聞こえるけどどっからそんな情報が流れるのかしら。

「おい入ってこーい」

キモデブが呼んできたので教室に入る。それまでがやがや五月蠅かったのが嘘みたいにシンと静まり返った。逆にこういうのやられるとやりにくいんだけど……

とりあえず黒板に名前を書く。風巳かぜみ 幽花かすかと。

「今日からこのクラスに入ることになった、風巳幽花よ。あんまり馴れ馴れしくするとぶっ潰すからよろしく」

「ツンデレロリッ娘ゆうかりんひゃっほおおおおおおおー！」

「すっげええええええ！幻想郷からちっちゃい幽香様が来たアアアアアア！」

「……………なにこれこわい。」

「あんたら私の自己紹介聞いてないの？私の名前はか・す・か！K A・S U・K Aよ！」

「ゆづかりん萌え〜」

「ゆづかりんかわいいよおおおおおおおおおおおおおおお！
だめだこいつら。」

そんなこんながあつてもう放課後、下校中よ。しょうもない変態共には制裁をくわえといた。そのときも「ああ！幽香様もっといじめてください！」「なんていつてきたからあいつらはもう救いようがな

いと思う。

「あっそういえばトースター買わないと・・・」

朝、故障（してない正常な）したトースターはとりあえずペチャンコにしておいた。

とりあえず値が張っててもいい物を買わないとね。

って、あれ？いきなり視界が霞んで・・・

気づけば森の中だった。

「・・・・・・・・・・」

なんとなく言ってみたもののただその言葉は木々に掻き消された。

このまま誰もいない様なトコにいてもしょうがないので近くの木の枝を折り、それを棒倒し（一人で）をして倒れた方向に歩いて行った。

「いつまで歩けばこの森をでれるのよ……………」

途方に暮れた。もう無理限界。寝よ……………

ガサガサッ

「何っ!？」

音のした方向を見るとカールのかかった金髪で赤黒いワンピース、帽子をかぶった少女、両鼻から大量の血を流して、いや噴出して危ない目をしながらハアハア言ってこちらを見てる少女がいた。
……………なにこれこわい。このセリフ何回目かしら？

いちわめ ちびゆうかりん？（後書き）

感想・クレーム・誤字脱字・適当に思いついた事、どんなことでも構いません！何か有りましたらお気軽に感想か活動報告のコメント欄に書き込みください！出来るだけはやくレス返したいしますよ！

では次回で！ばいばい

にわめ へんたい！（前書き）

どうも、糖類です。

そういえばもうかたっぽの小説でもちゃんとした挨拶したこと無いのでごこじでします。

と考えてた時期が私にもありました。趣味は糖分摂取とガーデニング。好きな花は彼岸花です。

それとこの主人公、風巳幽花ちゃんの説明。身長は大体レミリアとかそのあたりの面子より少し大きい小さいかぐらいの見事な口リです。ナニはついてますけどねw

それでは第二話です。酔狂な方だけどうぞ

にわめ へんたい！

「ハアハア小さい幽香様ハアハア」

少女は尋常じゃない量の鼻血を流しながら幽花にジリッジリッと近付いていく。元は綺麗な顔立ちのはずが鼻血と変態じみた行動により全て台無しになっている。また、幽花はその少女の異常行動に怯え、若干ばかりなみだ目になっている。

「ハアハア・・・幽香様襲って良いですよ？襲って良いんですよ？そんな淫らな格好をしてるってことは欲情していいってことですよ？」

淫らな格好？と何のことか分からなかった幽花だが自分の服を見てみると、今日下ろしたばかりの制服が厭らしい感じに破け、スカートの裾がピラツと捲れて中の純白のパンツがこんにちわと言っていることに気づき一気に顔を茹蛸のように真っ赤にする。

「ちっ違うわよ！これは・・・その、そういった訳じゃなくて・・・不可抗力で・・・ってそれ以前に『ゆうか』って誰よ！私は『かすか』よ！」

「へー不可抗力ですか。そうですか。では私从现在开始行うことも不可抗力でいいですよ？それに幽香様では無くて貴女は『かすか』というのですか。またまたご冗談を。そんなわけ無いじゃないですか。確かに口リっ気がかなり増してますけど可愛いですし、可憐ですし、いい匂いしますし、そそられますし、可愛いですし、可愛いですし・・・ね？」

それに対し、イヤイヤと首を振る幽花。しかしその行動は少女をより一層過激にさせてしまふ要素であることに気づかない。

「ぶはっ!?!?.....くっ、上目遣い&なみだ目だけでイケるのにさらに首を振る、ですか。どれだけ欲情させれば済むのですか。グハッ」

思わず鼻血の量を増やす少女。少女の周りには血がいたるところに飛び散っていたり池を作ったりしている。それを見て、よくこんな鼻血がでるもんだなあと現実逃避する幽花。

「うふふふ、ふふふふふふふ、うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

ゆらり、ゆらり、そんな効果音がつきそうな歩き方で彼女(彼)近づく少女。顔の上半分は髪の毛で見えなく、下半分は下半分で鼻血で真っ赤に染まり口はニタアと笑っている。B級ホラーで出てきそう。そんなホラーに心が若干折れかかっている幽花が耐え切れるわけなく、

「ひい!?!?ヒック.....こないでえ.....こないでよう.....ヒック」

と泣きそうになりながらも懇願するも無常にも少女は彼女(彼)の目の前まで来てしまった。

「ハアハア幽香様、ペロペロ」

「ひゃうう!?!?やっ.....りやめ!舐めちゃやらあ」

元々、女の子のような顔と声と性格で周りからはまず男として見られたことが無かった幽花。女の子に告白しても「ちよつと冗談はよしてよ」や「いえ、私は百合には興味ないので」と言われる始末であったので『そういう行為』なんぞしたことが無い。要は初心だ。そんな彼女（彼）が首筋をいきなり舐められて感じない分けない。

もう誰がどう見ても女の子である。最早男の娘ですらない。

「ぶふおあ！どれだけ忠誠心を出させれば済むのですか？そつだ、したの方も舐めて、へヴアアアアアアア！」

「ふえ？・・・え？」

突然、お空のお星様となつた少女に頭が追いつかない幽花。それもその筈、たつた今自分を襲っていたものがいきなり吹っ飛んでしまえば理解できないものである。

「まつたく、また仕事サボつて。しょうがないわねえ」

彼女（彼）がそんな声のした方を見ると緑の髪的女性、まるで彼女（彼）を大きくしたような女性がいた。

>???.? (作者の嫁) 目線<

お花の水遣りのついでに門の様子を見に行ったらそこはもぬけの殻

かわりに「可愛い娘を探してきます。探さないでください」なんてふざけた置手紙と逆刃の大鎌が。しかも血のしずく・・・まあ恐らく鼻血なんだろうけど、そのしずくが点々と逃走者の門番の居場所を知らせてくれる。というか鼻血たらしながら可愛い娘を探すって恐ろしすぎるわ。

そして門番を探し始めてすぐ、本当にすぐに見付かった。茂みに隠れて一方向を熱心に見詰めている。何を見てるのかはちょうど木で見えない。あつ鼻血の量が増した。

「うふふふ、ふふふふふふふ、うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

あれは危ない。絶対に危ない。このままじゃきつと大変なことになるわ。まあその展開を見ていくのも一興だけど。はあ。

「マスタースパーク」

とりあえずサボタージュをかました門番は処刑しといた。それで、あの子が襲おうとしてたのは何かしら？

「ひつく・・・グスツふえええん」

なにあれ可愛い。それにどこか、世界で一番美しくて可愛い少女に似てるわね。えっ？誰って？察しなさいな、私こと風見幽香よ。その子はとても可愛らしい声で泣いている。もう可愛すぎてゾクッ

とくるわねえ。これはもう私の妹にしないと気がすまないわ。

「そのあなた、怪我しなかった？怖かったでしょう、もう大丈夫よ」

「怖かったよう・・・ふええええん！」

「ぶつぶああ!？」

あ・・・危ない危ない。近づいてしゃがみ込んであやしたら飛び付いてきた。それで良い香りで思わず忠誠心が出ちゃったけど仕方ない。

「うふふ、怖かったわよねえ。でももう大丈夫だから安心しなさいな」

「ひつく・・・ぐすう・・・くう」

あら？緊張がほぐれたのかしら。寝ちゃったわね。ふふ、寝顔も可愛いわねえ。でも寝てる方が都合ね、今のうちに館に運んでおきましよう。うふふ、これからが楽しみだわ

少女移動中・・・

にわめ へんたい！（後書き）

読了感謝です！

うん、強引過ぎた。ラストは変ですね。まあ次からがんばろうw

見事なカリスマ（もどき）ブレイクwはんぱねえw

それと一話でなぜ気を失ったかを説明します。「多分貧血じゃね？」です。

深く考えないでください・・・すみませんすみません。

次話の最初で旧作キャラの大まかな説明いたしますので「旧作シラネ」の方でも楽しめるようがんばりますね

感想だろうとコメントだろうと何だろうと構いません！お気軽に感想にお書きくださいな〜

さんわめ むげんかんにて（前書き）

ども！糖類です。

二連続でこつちを投稿しましたw

うん、ゆうかりんのせいだ、絶対にw

とりあえず旧作キャラの設定を・・・とおもったのですが大体作中に書いときました。また新しいキャラや場所が出るたび書いてこうと思いますw

では、物好きな方だけどうぞ！第三話です

さんわめ むげんかんにて

草むらからところ変わって、とある館。人呼んで『夢幻館』。青を基色としていてあちらこちらに花壇がある。名前は現実世界と夢幻世界の狭間に位置している事から由来する。そんな館の一室に幽花はいた。

「……………んあ、あれ？ここは？」

「あら起きたの。気分はどうかしら、幽花ちゃん」

徐々に覚醒し、先の泣き出したことや幽香に抱きついたことを思い出して顔を赤らめる幽花。

「うう……………その、迷惑かけてごめんなさい」

「うふふ、顔を赤くしちゃって可愛いわね」

「そんな、可愛くなんか……………ってあれ？何で私の名前を」

「ああ、それなら勝手にこれを見せてもらったわ」

とスカートのポケットから彼女（彼）の学生手帳を取り出す幽香。そこには名前、年齢、性別などが書き記されていた。

「まさかとは思っけど本当に男？」

「本当に男よ」

それからしばらくして落ち着きを取り戻した幽花は幽香の選んだ服、幽香と殆どおそろいの服に着替えた。違う点をあげるとスカートの丈が短い事と全体的にサイズが小さい事だけである。もともと幽香に似ていたがその服を着たせいで完璧な口リ幽香となってしまった。

「ええつと・・・これでいいの？」

以前、館の一室改めベツトルームにはほとんど流される形で着せられたためついていけない幽花と

「いいわ。最高よ」

恥じらいながらも完璧に着こなしている彼女をみてうっとりとしている幽香がいた。

先ほど空の光の一つとなった門番の少女が見たら二人に発狂しながら飛び込んでいただろう。

「さて、着替えも済んだことだし・・・そうね、あらためて自己紹介でもしましょうか？」

「普通逆じゃないかしら？」

「いいじゃない別に、絶対の順番なんてないんだもの。貴女はもうわかるから、私ね。私は風見幽香。この館、夢幻館の主で貴女の姉になる妖怪（ひと）よ。こちらの部屋は自由に使っていていいわ、貴女の部屋ですもの。これからお風呂場とかそういったとこ案内するわ。まあざっとこんな感じかしら、これからよろしくね」

そう言うとベットから腰を上げ、ドアの方まで歩いていく。

「え、うん。よろしく……って、ちょっと待って！」

幽花の呼びかけで振り返る幽香。表情は実に満足げだ。

「何かしら？ 嗚呼、呼び方ね。自由に呼んでくれていいわ。幽香でもゆづかりんでも、あわよくばお姉ちゃんなんてでもいいわよ」

「じゃあ、幽香で……じゃなくて！ おかしいでしょ。つつこみどころありすぎよ！ 私の部屋って何よ！？ それに第一、私の姉ってなんで！？」

流されっぱなしだったがこそとばかりに彼女自身の不満をぶつける。

「あら、言っただけでなかつたかしら？ 貴女、外来人でしょ？」

「ふえ？ がいらいじんって何よ？」

と可愛らしく首をかしげた幽花であった。

> 幽香視線<

とりあえず幽花には幻想郷の必要最低限のことは教えておいた。新しい事を教えるたびに目を光らせたり、食付いてきたり、怖がりたりと実に感情豊かで可愛らしいっいたらありやしない。

「分かった？外はとっても危険な生物がいっぱいなの。幽花みたいな可愛い子がぶらついているとすぐにおそわれちゃうのよ。だからそんなところに野宿してみなさい、一発よ？だからそれを防ぐために住家とボーデイガードを提供するから代わりに貴女は私の妹になる、発音は同じだけど義妹じゃないわよ。いいわね？」

「うう・・・わかったわよ」

うん、やっぱり素直が一番よね。

「さて、それじゃお部屋案内しましょうか」

そういつて掛けてた椅子から立ち上がると部屋をノックする音が聞こえた。

「しつれいします。お掃除にきましたよ」

ドアを開けた者の正体はロリっ気がある顔立ちと金髪ロングと背中
の大きな黒い羽がトレードマークの少女だった。

「あらくるみ、いいところに来たわね。この子がこの館の二人目の主人で私の可愛い妹の幽花よ」

「えっと、はじめまして！私はこの館の門番と世話係を兼ねてるみです。よろしく願いします！」

「ああ、うん初めまして、幽花よ。まあ成り行きだけのお世話になる事になっちゃったからよろしくね」

これであと一人とあわせれば館の面子との挨拶は終わるわね。われながら幽花と使用人合わせても4人しかいないのにこんな馬鹿でかい屋敷に住んでるのはどうかしてると思うけどしょうがないわよね。

「気を取り直して、こんどこそ部屋案内を……ってアンタはなにやってんのよ」

ドアを開けるとそこにはさっきマスタースパークで吹っ飛ばした筈のもう一人の門番が荒い息をしながらたっていた。

さんわめ むげんかんにて（後書き）

どうもー読了感謝です！

そしてここでいららないいらないカミングアウト。

実はくるみなんです。が公式設定だと世話役ではなく、ただの門番です。でも家事をゆうかりんだけです。するわきやないだろうと思って門番二人組を世話役としてしまいました、すみません。そしてもう一つカミングアウト！

今作で変態と化すであろう人物を先に書いときます。

エリー（変態）、咲夜さーん（ロリコン）、絶対ゆる早苗ロリコンとなります。

無理な人はすみませんでした。他にも増えるかもです。あんま増やしません。がw

感想なりコメントなり何なりいつでも受け付けております！というかむしろ大々歓迎です！感想の量が私の原動力ですw

ついでにリクエストも受け付けますよ！出来る範囲でw

というわけでまた次回！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6772y/>

東方花妖怪

2011年12月10日02時48分発行